

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：32414

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25870683

研究課題名(和文) 幼児の「共助力」を育てる居場所に関する研究 地域子育て支援センターに注目して

研究課題名(英文) Studies on the Spark of Altruistic Behaviour in Children 0-2 Years Old

研究代表者

松永 愛子 (Matsunaga, Aiko)

目白大学・人間学部・准教授

研究者番号：30461916

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：子どもが社会の一員として生きる共助力を調べるため、利他行動に注目し、子育て広場におけるエスノメソッド調査を行った。

子どもは、まねを通して人と関わり始め、無意識に利他行動をし、相手から利他行動を引き出しながら、他者との一体感/違和感を体験していた。ワロン理論では、一体感は他者への肯定感、違和感は自己形成につながる。遊びの中で自己形成した子どもは、自発的に利他行動をとるようになると考えられた。さらに、子どもの利他行動は、挑戦・危険を伴う遊びに表れやすく、そのような遊びが可能な広場では、大人同士利他的人間関係を築いており、保育者が記録を書くことがそのような広場を生成するため有効であった。

研究成果の概要(英文)： This research focused on altruistic behaviour in children. With that premise, the aim was to discover, with respect to children 0-2 years old, (1) what route they take to engaging in altruistic behaviour, and (2) what human/physical environment is conducive to them engaging in altruistic behaviour. To achieve this aim, an observational study and survey of parent-child drop-in centres was conducted.

Firstly, It was found that for infants and toddlers to adopt altruistic behaviour, it is important that they gain experience through 'imitation' while playing with fellow children. Secondly, It was found that for children to adopt altruistic behaviour, it is important that they engage in play that allows an atmosphere of freedom, such as play that encourages challenge. Finally, It was additionally found that when the adults closest to children, such as parents and childcare providers, had altruistic relationships, children more readily engaged in altruistic behaviour.

研究分野：幼児教育臨床

キーワード：模倣 共感 利他行動 自己形成 子育て広場 居場所 ワロン エスノグラフィー

### 1. 研究開始当初の背景

近年、核家族増加、きょうだい数の減少、地域で子ども同士が遊ぶ機会の減少等が顕著です。この状況は、子どもが、家族以外の「他者」と出会い、相手との違いを受け入れ、交流する機会が減っていることを示します。それでは、子どもたちが社会の一員として生きる力を身に付けるためには、どのような環境が必要でしょうか。また、親や保育者に何ができるのでしょうか。

### 2. 研究の目的

本研究では、子どもの「利他行動」(相手の身になって考え、相手の喜ぶ行動を取る)に焦点をあてました。そして、0歳～2歳の子どもが、どのような道筋で利他行動を取るようになるのか、子どもの利他心を育てる人的・物的環境はどのようなものかを見出すことを目的としました。

子どもの利他行動は、人間固有の行動でもあり、現在、霊長類との比較発達心理学の立場や脳科学の立場からも非常に興味関心を持たれているテーマです。しかし、本研究のように、実験室を離れ、**生活の場でありのままの子どもの姿から子どもの利他行動をとらえようとした研究**は他にみられません。

子どもの利他行動は、子どもたちが他者と助け合い、自己表現を楽しみながら、社会の一員として生きる力、「共助力」、と繋がっていると考えます。本研究が、一人一人が生きやすい社会を作る一助になることを願っています。

### 3. 研究の方法

本目的のため、「子育て広場」での観察調査、アンケート調査等により研究1～3を行いました。子育て広場は、子どもとその親たちが、保育者に見守られながら、自由な時間に来て遊ぶ、親子の出会いの場です。「子育て広場」は、子どもの生活の場に不可欠な、親子、親同士、親子と保育者の人間関係を観察することができました。

### 4. 研究成果

研究1. 「子育て広場」観察調査 遊びの中から利他心が生まれる

#### (1) 研究方法

東京都内の「B 子育て広場」を研究対象とし、2013年1月～2015年11月、35日、述べ500時間の参与観察を行いました。毎回の観察では、研究者2人以上が同時に観察を行いました。“子育て広場における子どもの「社会性の芽生え」を探す”という大まかな観察の視点を決め、具体的にどのような行動を焦点化するかについては参与観察をしながら考えていく**エスノメソッドによる観察**を行っています。

毎回の観察後、各研究者のフィールドノートの内容を全員で共有しました。そして、なぜその事例を収集したのかについて話し合いました。その過程で、遊びの中で、**子ども同士が「まね」をしあい、場所や物を共有しようとする場面、その際の周囲の大人たちの子どもへの関わり方**に焦点があたりました。

最終的に、表1「観察事例の数と内容」にあるように、**事例は461件収集されました。そのうち、子どもの「まね」事例は、182件(39%)を占めました。**さらに、そのうち、**異年齢の子ども同士の交流の事例が記録されたのは、122件(69%)**ありました。このことから、大人と子ども間よりも、年齢差のある子ども同士の間でまねが頻繁に起きていることがうかがえました。

本研究は、この子ども同士のまねの事例と、関連する文献研究から、乳児の利他心の育ちの過程を理論化しました。

表1「観察事例の数と内容」

年齢 <sup>①</sup>	年齢ごとの事例数(異年齢交流含) <sup>②</sup>	
		「まね」事例数と割合 <sup>③</sup>
0歳 <sup>④</sup>	78件 <sup>④</sup>	13件(17%) <sup>④</sup>
1歳 <sup>④</sup>	94件 <sup>④</sup>	42件(45%) <sup>④</sup>
2歳 <sup>④</sup>	146件 <sup>④</sup>	56件(38%) <sup>④</sup>
3歳 <sup>④</sup>	62件 <sup>④</sup>	23件(37%) <sup>④</sup>
4～6才 <sup>④</sup>	81件 <sup>④</sup>	48件(48%) <sup>④</sup>
計 <sup>④</sup>	461件 <sup>④</sup>	182件(39%) <sup>④</sup>

#### (2) 参与観察の結果

子どもは「まね」を通して人と関わり始めます

子どもの行動	まね
子どもの内面	共感

子育て広場では、0歳～2歳の子どもたちのあいだで「まね」がよく起きていました。

子どもは、相手の動きを推論して自分も行う（右手を動かしてから左足を前に出す等）…わけではなく、瞬時に相手の動きを再現します。このことから、「**直感的に相手の身になる**」という**共感力**を、子どもたちが日々発揮しながら生活していることがうかがえます。

まね、は霊長類の中でも人間だけが得意な行動です。まねに必要な共感力は、霊長類の中でも人間だけが発達させてきた力です。

子どもは、まねを通して、人と関わる快と不快とを感じます

行動	共有	行動	いざこざ
内面	快感	内面	不快感

子どもは、「まね」をする時、人と同じ場所、同じモノ、同じ人、同じ動き、同じことばを共有しています。その時、子どもは人との関わりを楽しさを感じていることがわかりました。

子どもは、「まね」をする時、物の取りあいや、失敗など、思い通りにならない出来事にあっていました。その時、子どもは、不快を感じていることがわかりました。

子どもは、無意識的に利他行動をしながら、自己に目覚めていきます

行動	無意識的な利他行動
内面	自意識の芽生え

子どもは、「まね」を通して、人と同じ場所、モノ、動き、ことばなどを共有しながら、人と関わる楽しさを感じます。しかし、これはまだ、自発的な行動ではなく、周囲の状況や人との関係性の中で、無意識に行っている行動です。

また、子どもは、「まね」がもたらす不快体験から、自分と他者との違いを知っていきます。これは自己の芽生えといえます。

「まね」に含まれる楽しさと、不快。この二つは、1つの事例のなかで観察されることが多くありました(全まね事例の90%)。つまり、**二つの体験は、切り離せない出来事だといえるでしょう**。不快状況だけを避けようと、大人があらかじめ遊びを制限すると、自意識の芽生えに必要な体験もできなくなってしまうかもしれません。

自己を確立した子どもは、  
自発的な利他行動をとれるようになります

行動	自発的な利他行動
内面	自己形成

子ども同士の遊びの中で、人との関わりを楽しみつつ、相手との違いも感じつつ、子どもは自己を確立していきます。そのように育った子どもは、自己表現をすることと同時に、自発的に利他行動を取ることができるようになると思われます。

### (3) 研究1の結論

子ども同士が出会い、安心して遊べる「居場所」を作ること

子どもは、遊びの中で「まね」をたくさんして、人と関わる楽しさを知りながら、自己形成をしていきます。「まね」は大人と子どもの間でよりも、子ども同士の方が頻繁におきていました。子ども同士が出会い、親や保育者などの大人に見守られながら、安心して遊べる「居場所」を作っていくことが大切です。

子どもの遊びをむやみに制限したり、止めたりしないこと

子どもは、遊びの中で人と関わる楽しさを知るだけでなく、いざこざや危険も経験します。その二つは、簡単には分けられません。周囲の大人は、不快状況に対して寛容になり、むやみに遊びを止めたり制限したりしないことが大切です。

研究2. 子育て広場の常連親が考える「子どもが広場で身に付けた力」

### (1) 研究目的

研究1と同じ「B子育て広場」に常連として通っ

てきていた親の視点から、「B 子育て広場に通っている際に、子どもが身に付けた力はどのようなものだったか」、「子どもが幼稚園や保育園に入園した際に、どのような場面で B 子育て広場の経験が役立ったか」知ることを目的としました。

## (2) 研究方法

観察を行った B 子育て広場において、かつて、常連として週に1~2回通っていた親子を対象としてアンケートを実施しました。アンケートを51通、郵送による配布、そのうち30通を回収。回収率は、70%。そのうち、有効回答票は29通。

## (2) 回答者の属性

回答者は全員女性。回答者の年齢は、30代が16名(53%)、40代が13名(43%)、無記入が1名となっています。回答者(親)が「B 子育て広場」に通った年数は、平均4.2年。回答者の育てている子どもの数は、1家族につき平均して2.2名。全家族を総合すると、子どもの数は62名。その性別は、男子35名(56%)女子26名(41%)です。回答者の子どもたちが「B 子育て広場」に通い始めた年齢は、平均7か月児、通った期間は平均3年。就園年齢は平均2歳8か月です。子どもたちの就園先は、幼稚園がもっとも多く29名(46%)、保育園13名(21%)、子ども園9名(14%)となっています。

## (3) アンケート結果

### B 子育て広場に通ったことで、子どもが身に付けた力

「お子様が、B 子育て広場に通っている間に、B 子育て広場の環境だからこそのできるようになったと考えられること」について、あてはまるものを、複数選択可能な形で質問しました。(子どもが複数いる場合は、一番A 子育て広場に通った期間の長い子どもの中から任意に選んで回答してもらいました。)

**1位「他の子どもがしている楽しそうな遊びをみて、真似して行動に移す姿が見られるように**

**なった」(23名、79%)**

**2位「他の子どもと一緒に遊べるようになった」(21名、72%)**

3位「スタッフや親たちと一緒に遊ぼうとするようになった」(21名、66%)

### 就園後に役立ったと思うA 子育て広場での身に付けた力

「お子様が、幼稚園・保育園・子ども園などに通い始めた時、B 子育て広場に通った経験がいかにされたと思うこと」について、あてはまるものを、複数選択可能な形で質問しました。

**1位「子どもが、友達を作ることができる」(18名、64%)**

**2位「子どもが、友達と協力して活動する(遊ぶ)ことができる」(14名、50%)**

3位「子どもが、年下の子に優しくできた」(13名、46%)

## (4) 研究2の結論

乳幼児は、「子育て広場」の環境の中で、「子ども同士関わる力」を身に付けていると考えられます。これは、幼稚園や保育園に就園した際に「友達を作る力、協力する力」につながっていると考えられました。

## 研究3. 子どもの利他心を育てやすい設備・運営方法・援助方法

### (1) 研究目的

乳幼児の利他心が育まれやすい、子育て広場の設備、運営方法、スタッフの援助方法、子どもの遊び方、親子の広場での過ごし方の特徴について、調べることを目的とし、全国の子育て広場スタッフにアンケート調査をしました。

今までの研究1. 研究2から、子どもの利他行動の芽生えには、遊びの中で起こる「まね」が重要であることがわかっています。そこで、「まね」が起きることと関係の深い、「子育て広場の条件は何か」カイ二乗検定によって調べました。

本調査では、「子ども同士が遊ぶなかで「まね」が起きているか？」という質問に対し、99%の広場がイエス、と答えました。しかし、“子ども自身がどのくらいその遊びを楽しんでいるのか”、“どのくらいの頻度で起きているのか”という、まねの「質」はわかりませんでした。しかしながら、先行研究から、質の高いまねが起きている場合、その時/その場で起きる「まね」だけではなく、「昨年流行した遊びを、今年は次の世代の子がする」というような、時間を超えた「遊びの伝承」が起きることがわかっています。**「遊びの伝承」は、質の高い「まね」が起きている表れ**であるといえます。このため、本研究では**「遊びの伝承が起きているか」という項目と関係性の深い子育て広場の条件は何か**を、調べました。

## (2) 研究方法

2016年2月8日、子育てひろば全国連絡協議会の名簿をもとに、873通発送、回収491通、回収率56.2%であった。本調査の回答者は、NPO団体が多くを占めています。

## (2) 研究結果

「子どもの遊びの伝承がみられる(昨年流行した遊びが次の世代の子どもたちによって遊ばれる)」と答えた広場は、171件(34.8%)。

また、本質問項目と関係の深い、子育て広場の条件は以下の通りでした。

子どもたちの遊び方 自由に遊べていると、「まね/遊びの伝承」が起こりやすい

・子どもが危ない遊びや汚れる遊びも経験できる ( $\chi^2(16) = 105.1 \quad p < .01$ )

・子どもが遊ぶのに十分な大きさの屋外環境がある ( $\chi^2(2) = 5.37 \quad p = .06$ )

・畑・果樹・木などがあること ( $\chi^2(4) = 17.8 \quad p < .01$ )

・水遊びができる ( $\chi^2(2) = 7.33 \quad p < .05$ )

・砂場や砂場の道具がある ( $\chi^2(4) = 11.72 \quad p < .05$ )

子育て広場の中で、危ないことや汚れることも

経験できる**「自由」な雰囲気**があることが、子どもの「遊びの伝承(まね)」を起しやすくしているようです。また、設備として、**屋外環境があり**、砂場での泥遊びや、プールなどの水遊び、畑の土と触れ合うこと、植物を育てたりすること、などが、「遊びの伝承(まね)」を起しやすくしているといえます。しかしながら、十分な大きさの屋外環境がある、と答えている子育て広場は全データ中128件(26.2%)であり、少数派です。

スタッフと親との関係 スタッフと親は、親密な関係にある

・スタッフが親子に作業の協力など手伝いを頼むことがあること ( $\chi^2(8) = 26.2 \quad p < .01$ )

・利用者だった親がスタッフとして働くようになること ( $\chi^2(16) = 37.08 \quad p < .05$ )

親同士の関係 親同士、なんでも言い合える関係にある

親達は他の親の子どもの行動に対し気軽に注意したり声掛けしたりしている ( $\chi^2(4) = 32.9 \quad p < .01$ )

**親とスタッフの親密さ、親同士の親密さが、「遊びの伝承(まね)」に影響を与えています。**広場の人間関係がよいと、親達は、お互いの子どもの遊びが時に危なくなったり汚くなったりしても寛容になることができ、子どもが自由に遊べ、「遊びの伝承(まね)」がおきやすくなると考えられます。

親がスタッフとして働くようになる広場は253件(49.5%)、スタッフが親子に手伝いを頼む広場は251件(51.1%)で、半数近くに及んでいます。また、他の親の子どもに気軽の声掛けしたり注意したりできる関係にある広場は255件(58.1%)となっています。

スタッフの仕事の仕方 プロ意識がある

・スタッフが子どもが遊びの中で経験していることについて、毎日記録を書くこと ( $\chi^2(2) = 6.36 \quad p < .05$ )

・毎日書く記録を、親子への関わり方の検討のために利用していること ( $\chi^2(4) = 12.9 \quad p < .05$ )

**スタッフが子どもの遊びや、自身の親子への**

**関わり方を客観的にとらえ、他のスタッフと共有し、日々自身の実践をよりよくしようとする姿勢を持っていることが、「遊びの伝承(まね)」が起きやすくさせると考えられます。**

しかしながら、子どもの遊びの記録を書いているスタッフは、245 件(50.3%)、記録を関わり方の検討のために利用しているスタッフは 333 件(67.8%)、でした。スタッフが自分たちの援助の重要性を認識することが必要でしょう。

#### 研究1～3の総合的な結論

乳幼児は、子ども同士でマネをきっかけとして遊ぶ経験を通して、利他行動をとる力の基礎を身に付けることがわかりました。

子どもが、挑戦しがいのある遊び、少し危険を伴う遊びを経験できる場合、「遊びの伝承(まね)」が起きやすいことがわかりました。また、親同士が言いたいことを言いあえたり、親とスタッフの人間関係が親しかったりすると、「遊びの伝承(まね)」が起きやすこともわかりました。これは、子どもをとりまく大人の人間関係がよいと、大人同士気を使いすぎなくてすみ、子どもの遊びの自由を許容しやすくなるからではないかと考えます。スタッフが、記録を書き援助に活かすというプロ意識を持っている場合は、「遊びの伝承(まね)」が起きやすこともわかりました。スタッフによる親子関係や親同士の関係への援助が、子どもの遊びに影響を与えています。

つまり、子どもをとりまく大人の人間関係がよいと、子どもは「遊びの伝承(まね)」を通して利他心を培いやすくなります。親同士の人間関係を良好にする専門家の援助の必要性がみえてきました。その方法については、今後の課題となっています。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

松永 愛子、齋藤 史夫、有馬 正史、子育て広場における乳児の対人関係の特徴

模倣に含まれる両義的体験が促す自己形成、目白大学総合科学研究紀要、査読有、13号、2017、69-82

松永 愛子、親子の「主体性」を育む「地域子育て支援センター」におけるスタッフの援助実践 他者性の変化の過程における「居場所」の機能、目白大学総合科学研究紀要、査読有、10号、2014、9-22〔学会発表〕(計5件)

松永 愛子、丸谷 充子、広場臨床を考える2 - 職員のカンファレンスのナラティブ分析から -、日本保育学会第69回大会、東京学芸大学、2016年5月7日

松永 愛子、丸谷 充子、広場臨床を考える - 職員のカンファレンスのナラティブ分析から -、日本保育学会第68回大会、椋山女学園大学、2015年5月10日

松永 愛子、齋藤 史夫、有馬 正史、乳幼児の「共助力」を育む地域子育て支援センターの役割 共感の育ちにおける模倣の意義、日本保育学会第68回大会、椋山女学園大学、2015年5月9日

松永 愛子、“子育てひろば”における乳幼児の「共助力」の育ちに関する一考察、日本保育学会第67回大会、大阪総合保育大学、2014年5月18日

松永 愛子、有馬 正史、齋藤 史夫、乳幼児期の「共助力」を育む親子の「居場所」のあり方、日本福祉文化学会、別府国際コンベンションセンター、2014年10月5日

〔図書〕(計1件)

高橋 貴志・目良 秋子編著 青木 聡子・伊藤能之・粕谷 亘正・細田 成子・佐藤 有香・坂 本喜一郎・関川 満美・仙田 孝・中村 陽一・松永 愛子・百瀬 ユカリ 共著、コンパス保育内容環境、建帛社、総頁144、2018年4月出版

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕ホームページ等

幼児期の共助力の調査研究について

[http://www.ssc-npo.or.jp/?page\\_id=1455](http://www.ssc-npo.or.jp/?page_id=1455)

乳幼児保育に関するエスノメソッド研究

<https://aimat1978.wixsite.com/ethnomethod-child>

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

松永 愛子 (Matsunaga, Aiko)

目白大学・人間学部・子ども学科・准教授

研究者番号：30461916

(2)研究協力者

齋藤 史夫 (Saito, Fumio)

有馬 正史 (Arima, Seisi)